

アイアル少額短期保険

「無縁社会のお守り」が反響呼ぶ

増加する孤独死に対応

孤独死が大きな社会問題になっている。3月7日に東京都立川市で都営アパートに住む95歳と63歳の母娘が遺体で発見され、さらに3月11日には足立区のアパートで70代と80代と見られる男女の遺体が見つかった。東京都監察医務院が行った世帯分類別異状死統計調査(2003～07年、いわゆる東京都23区における孤独死統計)では、65歳以上の孤独死は03年の2672人から07年には4291人となり、増加傾向が顕著だ(グラフ)。また、自宅で行く65歳以上の一人暮らし高齢者は、病院で死亡する高齢者の約4倍となっており(東京都監察医務院)、一人暮らしの高齢者にとっては、もはや病院で亡くなる時代とはいえなくなった。そうした状況の中、孤独死に対処する保険が現在、注目を集めている。

孤独死で問題を大きくしているのが、賃貸住宅で死亡したケース。遺体発見まで数日、中には数カ月経過するケースもある。そうした物件は新たな借り手がなく、オーナー側は家賃収入が得られなくなるリスクがある。

また、自殺したケースでは遺族に清掃費用や家賃の減額分を請求することもあり、中には数百万円を請求された遺族もいる。一方、身寄りがないケースや引き取りを拒否する遺族もあり、オーナーが費用を負担する場合もある。

そうした孤独死などに係る特殊清掃を専門に扱っている業者の話では、費用は遺体発見までの日数や場所が大きく影響さ



安藤氏

そうした孤独死などに係る特殊清掃を専門に扱っている業者の話では、費用は遺体発見までの日数や場所が大きく影響さ

直すため費用は高額になる。こうした孤独死の問題は、貸す側も借りる側も大きなリスクがある。

全国のオーナーや管理会社から問い合わせ相次ぐ

そうした社会的問題への解決策の一つとして注目されているのが、孤独死のための保険(賃貸住宅管理費用保険)だ。

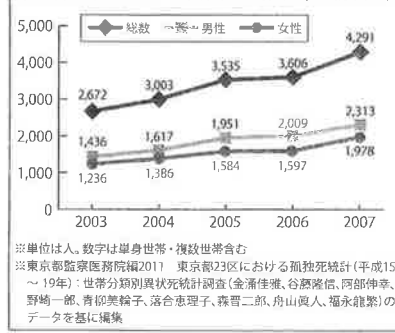
アイアル少額短期保険の「無縁社会のお守り」は、オーナーの「空室期間の家賃」「原状回復に掛かる費用」といった経済的な損失を補償する。2月27日に商品改定を行い、保険加入可能な被保険者の条件を、それまでの「所有または管理戸室」という条件から加入したいというオーナーや商品

管理戸室数300戸室以下に改定

たいというオーナーや商品

を扱いたいと

東京都23区における孤独死の推移(65歳以上)



いた。特に、家賃保証会社は家賃滞納者の住居を訪問した際に入居者が孤独死している場面に遭遇するケースもあるからだ。

こうした孤独死と保険に関しては自治体も問題意識を持っており、不動産関係者との意見交換会に安藤氏が呼ばれて説明したこともある。

一方、孤独死の問題は高齢者だけではなく、若い単身世帯も自殺や心筋梗塞(こうそく)などで死亡するケースが増えている。安藤氏は「人が死を迎える場所が賃貸住宅の部屋の中というのが50%以上になることを想定して、国も自治体も動かなければならぬ」と指摘する。

孤独死のための保険は現在、アイアル少額以外に数社が取り扱っているが、安藤氏は「孤独死のリスクに対する保険がニッチではなく一般的な商品となってきたときに、超高齢社会の中で自治体や保険会社がそれぞれの立場でどう対応するのか、われわれがどのような商品を提供すべきかを考えていかなければならぬ」と強調する。

現在、「無縁社会のお守り」は、貸し手側、つまりオーナーのための保険だが、安藤氏は借り手側にもニーズがあるため、将来的には借り手側の商品開発も手掛けたいとしている。

この商品の開発に2年前から着手してきた安藤克行社長は「高齢社会における孤独死は、日本社会が注目する問題。それだけに反響は大きく、『こういう商品を持つていた』と感謝されるオーナーもいる」と言う。安藤氏は開発に当たって、マーケットリサーチに重点を置き、遺品整理会社や特殊清掃会社を訪問し、現場の様子や作業状況を聞いて商品化に役立てた。また、住宅供給公社や家賃保証会社にも足を運び孤独死の現状を聞き